問いも答えも緑の中

いま子どもたちは No.403

森の学校 1

宮崎県五ケ瀬町は、九州山地のほぼ中央で熊本県と接する。山がちで南部は標高1千㍍を超す。町の面積の88%が森林だ。初冬には雲海がたなびき、「日本最南端」のスキー場もある。

この町に、全国で最初にできた公立の中高一貫校がある。

1994年に開校した県立五ケ瀬中等教育学校だ。1学年1学級（定員40人）の全寮制で、現在の生徒数は228人。

「うわっ、ぬるぬる！」

カボチャほどの大きさのこんにゃくイモを包丁で切りながら、男子生徒が声を上げた。

10月下旬にあった2年生の体験学習。地元のこんにゃく農家、甲斐友子さん(57)を講師に迎え、特産品のこんにゃく作りに挑戦した。

まず、イモの皮をむいて一口大に切る。水を加え、ミキサーにかける。たらいに移し、泡立て器でかき混ぜる。粘りが出てきたところで、甲斐さんは透き通った黄色い液体をたらいに注ぎ入れた。雑木の灰の煮汁を濾(ろ)過(か)して作った「あく」。どろどろのイモを固めるのに欠かせないという。

あくを入れたイモを再びかき混ぜると、白っぽかったイモが少しずつ茶色に変わり、ぷるぷるに固まっていく。

「おーっ」「すげー！」「あくを入れただけでこんなに変化するって不思議」

のぞき込んでいた生徒たちから一斉に声が上がった。

「フォレストピア学びの森」――。周囲の豊かな森にちなみ、同校にはそんな「別名」がある。「自然を学ぶ 自然に学ぶ」をうたい、体験と探究に取り組む。自分で見つけた課題を自分の力で研究し、論文にまとめるのが特徴だ。

その実践の場は2週に1度、午後の授業3コマを使った「フォレストピア学習」だ。わらじ作り、カヌー、茶摘み、化石発掘、人形浄瑠璃体験……。地域の自然や伝統文化を体験し、そこから課題や興味・関心を見つけ、学年末に研究発表する。

3年生と5年生（高校2年）は、自分の好きなテーマを1年かけて調査研究し、A4判10枚ほどの論文にまとめる。こうした取り組みは、2002年度に全国で始まった総合学習の先駆けとも言われている。

同校には県内全域から生徒が集まる。フォレストピア学習に憧れて入学する生徒も多い。

3年の荒木藍さん(15)もその一人だ。小学生のころから理科実験が大好きで、「この学校ならきっと自分の好きな研究ができる」と思った。やはり2年生のときにこんにゃく作りを体験。ふだんは絶対に口にしない灰を食べ物に使うことに驚き、あくの働きに興味を持った。でも、こんにゃくとあくの関係を研究した先輩は何人もいる。

「人と違う研究がしたい」と、もち米をあくに浸し、弾力のある食感を作る「あくまき」を題材に選んだ。南九州の郷土料理だ。夏休みの自由研究で、もち米をあくに漬ける時間や、あくの濃度を変えながら、もちの弾力を比較。あくまきがおいしくできる条件を探した。

あくの研究は今も続けている。今年の論文のテーマは、あくがイモやもち米を変化させる原因を突き止めること。週末ごとに寮の自室で顕微鏡をのぞき、あくがもち米に浸透していく様子を記録し続けている。

「フォレストピア学習では、いろいろなことを経験できる。こんにゃく作りがあくの研究につながったように、研究のヒントはたくさんあります」

2年の園田理咲さん(13)も、フォレストピア学習に魅力を感じてこの学校に入った。

昨年、近隣の石橋めぐりをしたとき、アーチ状になっている石橋の仕組みに興味を持った。学年末の研究発表では、石橋の強度をテーマにした。スポンジを組み合わせて橋の模型を作り、アーチ状と平らな橋のどちらが強度があるか、おもりをのせて実験した。その結果、アーチ状の橋は平らな橋の約60倍の重みに耐えられるとわかった。

「単なる体験に終わらず、興味を持ったことを深く追究できるのがいい」

昨年度に赴任した坂本一信校長(56)は、94年の開校当時、同校の国語教諭だった。「当時は『ヤマメ釣りのできる東大生』を生むのが目標だった」と振り返る。進学校でありながら体験学習も大切にする。その姿勢は今も変わらない。

開校以来、東大の合格者は計5人いる。12年春の卒業生38人の進路をみると、29人が大学、2人が専門学校、1人が短大に進学した。残る6人のうち4人が予備校へ。2人は就職した。

教員の間では、体験学習を重視するか、進学を重視するかで意見が分かれ、ときには激論になる。「みんなで意見をぶつけ合い、生徒の状況も見ながら進学と体験のバランスを考えてきた」と話す。

人口約4500人の五ケ瀬町には、デパートもゲームセンターもカラオケボックスもCDレンタル店も映画館もない。

それでも生徒たちは、「最初は何もないと思ったけれど、この町では『何か』が見つかる」と口をそろえる。前生徒会長で6年（高3）の児玉梨沙さん(18)は「地域の人との出会いや、五ケ瀬でしかできない経験がたくさんあるんです」と笑顔を見せた。

緑に囲まれた学校で、自然や地域から学び、成長していく子どもたちの姿を描きます。

（斉藤純江）

▲甲斐友子さん（左端）からこんにゃく作りを教わる2年生

グラフィック・下村 佳絵 / The Asahi Shimbun

総合的な学習の時間（総合学習）

2002年度から小中学校で本格的に始まった。教科横断的に自ら学び、考える力を身につけるのが狙い。「ゆとり教育」の象徴でもあったが、「脱ゆとり」路線のもと、小学校では昨年度、中学校は今年度から授業時数が減った。現行の年間授業時数は、小学3～6年が年70時間、中学では1年が年50時間、2～3年が年70時間。高校では3～6単位が必修。